

八重山の風土・歴史・文化

波照間 永 吉

1. 八重山の風土

北は千島の島々から北海道、本州、四国、九州そして南西諸島とつらなるヤポネシアの南端に八重山の島々は散在する。石垣島、竹富島、黒島、新城（上地・下地）島、小浜島、由布島、鳩間島、西表島、内離島、与那国島、波照間島の12の有人島と、尖閣諸島、仲之御神島、嘉弥真島、外離島など20の無人島を総称して八重山諸島という。その総面積は584.7km²で、沖縄県全体の約26%を占める。その位置は、北緯24°3′～25°25′、東経122°56′～124°20′の範囲にある。他島との位置関係で見れば、例えば石垣島は、沖縄本島那覇の南西方向約439km、宮古島平良の南西方向約130km、そして台湾北部より東方向約260kmの地点に位置している。

これらの島々をまとめて「八重山」と称しているが、八重山方言ではそれをヤイマ（与那国方言でダマ〈八重山〉というときは主島の石垣島をさす）、沖縄方言ではエーマという。『おもろさうし』（1531年巻1成立）には「やへましま」⁽¹⁾「やゑましま」とある。またその対語として「はたらしま」（端の方の島の意）といているのは、八重山が中央（首里）から遠く隔たった辺境の地である、と意識していたからであろう。

12の有人島のうち与那国島を除いた島々では、必ずどこかの島が望見できる。例えば日本最南の地波照間島では、北方に西表島が、東北方に石垣島がみられる。西表北方の鳩間島では、島の南方に西表島の緑濃い山々と白い砂浜が眼前に迫り、東方に石垣島の島影がみられる。竹富島では波照間、与那国の隔遠の島をのぞいて、ほとんどの島がみられるほどである。

ただ与那国島だけは、島の民謡「与那国シュンカニ」に「いっふんていま」（一本島）とうたうように、まったくの孤島である。島の西端・西崎^{いりざき}で年に数度、台湾の島影がうかびあがるのがみえるのは有明である。

このような地理上に位置する八重山諸島の風土は、亜熱帯性海洋気候につつ

まれている。一年の平均気温は摂氏 23 度～24 度で、最暖月（7 月）の平均気温は 29 度、最寒月（1 月）の平均気温は 17 度である。雨は年間を通して降るが、梅雨期（5～6 月）と台風期（7～10 月）に集中する。

「台風銀座」の異名もあるように、毎年台風にみまわれる。しかし、台風は雨をもたらすので、特別に台風除けのまつりはない。一番恐ろしいのは干魃で、台風期に雨が降らないと干魃となって、農作物に大きな打撃を与えることになる。古来より八重山の島人がとてもおそれたことは、日照りが続くことであつた。そのため、各島々村々では、雨乞いの祭儀がながく伝えられてきたのである。

八重山の島々は地理学上、高島（高い山のある島）と低島（山がなくて平坦な島）に分類される。石垣島、小浜島、西表島、内離島、外離島、与那国島、尖閣諸島などが高島で、石垣島にはオモト岳（沖縄県の最高峰。525.8m）をはじめ、^{フカイ}桴海オモト岳（447.4m）、^{ヤマハレー}山原岳（433.4m）、^{ウツグキ}大岳（402.8m）などの山々が、西表島には古見岳（469.7m）、ゴザ岳（420.7m）、テドウ岳（442m）、波照間森（447.4m）などの山々が重畳としている。一方、低島は、竹富島、黒島、新城（上地・下地）島、鳩間島、波照間島などである。

地質の面からみると、高島は古生代から第 3 紀中新世の複雑な地質であるのに対し、低島はすべて第 4 紀琉球石灰岩におおわれた新しい島である。

高島には高い山丘があるため、河川・沼沢がみられ、水田耕作が可能である。それで、八重山ではこれらの高島を谷にタングンジマ（田国島）と称している。これに対し低島は、琉球石灰岩の上を薄い表土がおおうだけで、河川・沼沢もみられず、飲料水にもこと欠くほどであり、もとより農耕地としては悪条件の重なった島である。したがって、水田耕作はみられず、雑穀中心の畑作が行なわれることより、ヌングンジマ（野国島）と称される。

このような地理・地質・気候的環境のもと、八重山には特有の動植物が生息・分布している。動物では、「20 世紀最大の発見」といわれたイリオモテヤマネコ、イリオモテキクガシラコウモリ、セマルハコガメ、カンムリワシ、ヨナグニサン（世界最大の蛾）、コノハチョウなど、植物ではヤエヤマヤシ、ヤエヤマシタン、サキシマスオウノキ、リュウキュウチシャノキ、カンヒザクラ、ヒルギなどである。特に西表島の浦内川、仲間川、前良川、後良川、石垣島の

宮良川、名蔵川、吹通川などの下流一帯はヒルギ（マングローブ）の大群落となっており、熱帯地方をおもわせる特異な景観をみせている。

風土的特質のもたらしたのものには、マラリア、フィラリアといった風土病もあった。これらの風土病—特にマラリアのために、近世期以後の八重山の歴史の悲劇がもたらされたといっても過言ではないだろう。その病害は近代以後もつづき、明治20年代、八重山を訪れた笹森儀助はその目をおおうべき惨状を報告している。マラリアは今次大戦中及び終戦後も猛威をふるい、銃砲の弾丸にたおれた人よりも、疎開地でマラリアに冒され死んでいった人の方が多かった⁽²⁾のである。八重山のマラリアが撲滅されたのは1960年代に入ってからである⁽³⁾。

⁽⁴⁾ 八重山諸島は現在、一般的には八重山郡と呼ばれ、石垣市（石垣島）、竹富町（竹富、黒島、新城〔上地・下地〕、小浜、鳩間、内離・外離、西表、波照間の各島）、与那国町（与那国島）の1市2町がある。総人口は47,481人で、石垣市42,113人、竹富町3,416人、与那国町1,952人となっている。竹富町・与那国町では過疎化がつづいている。

2. 八重山の歴史のあらまし

八重山にいつ頃から人が住みはじめたかという点、これは現在の段階ではよく分っていない。

八重山の歴史はまず先史時代と有史時代の2つに分けられる。その境目は15世紀であるが、それ以前を先史時代とし、考古学の現在の研究では第Ⅰ～Ⅳ期に分けてとらえている。しかし、第Ⅲ期と第Ⅳ期のあいだには異質性よりも同質性のほうが多く、その区分は必ずしも画然とはなっていないようである。

第Ⅰ期は無土器の貝塚形成期で、遺跡からは磨研石器やシャコガイの稜部を利用した貝斧が出土している。代表的な遺跡としては名蔵川の低湿地帯及び砂地に立地した名蔵貝塚群がある。

第Ⅱ期になって土器があらわれる。この土器は、土器外壁面に耳＝把手がついていることが特徴で、八重山式土器とよばれる。この外耳土器の使用とともに、原始的な農耕も行なわれていたらしい。名蔵の大田原遺跡や崎枝の崎枝赤崎遺跡などがある。

第Ⅲ期は13世紀から始まるが、この時期にいたって、ようやく歴史がそれらしく動き出すようである。第Ⅱ期のものより発達した八重山式土器が盛行する一方、海外との交易がかなりさかんに行なわれていたと思われる。それは遺跡から出土する中国製陶磁器、宋銭、須恵器などによって知られよう。川平の川平貝塚、登野城の山原貝塚、新川のビロースク貝塚など、八重山の考古遺跡の約8割がこの時期のものとする。

この時期の遺跡として著名なのは石城山遺跡、フルスト原遺跡である。これらの遺跡には村建てや交易の説話が付随している。例えば石城山遺跡は、石垣村を創建したマタネマシス、ナータハツ、ピサカカーラの3人の兄弟の居住地であったといわれる。この3人の兄弟が石城山から、南の方の低平地帯に下りてきて、現在は石垣の街中にある宮鳥御嶽の近くに村を開いたと伝えられている。これが八重山の村建ての初めで、これから石垣、登野城、大川、新川の四⁽⁵⁾ヶ村がひらけてきたというのである。

第Ⅳ期は、上にも述べたように第Ⅲ期との区別は明確にしがたいが、この期の遺跡は近世村落跡と重なっている。このことから、この期の生活が八重山の先史時代と有史時代をむすぶものとして注目される。土器は八重山式土器から次第にパナリ焼きへと移行していく。崎枝の屋良部村跡遺跡、桃里の仲与銘村遺跡などがある。

第Ⅲ・Ⅳ期の海外との交易により、進んだ文化・文物が流入し、農業等の生産活動にも変化が生じたことと思われる。大浜村の崎原御嶽の由来として語られるヒルマクイと幸地玉ガネの、鉄製農具を求めての薩州坊津への航海なども⁽⁶⁾あるいはこの期のことかもしれない。

ところで、このような考古学的な歴史考証とは別に文献をみると次のようなことがある。『続日本紀』和銅7年(714)に「大連建治等南島奄美信覚及び球美人五十二人を率いて帰朝す」とある記事、同じく和銅8年の「南島の奄美・夜久・度感・信覚・球美ら来朝して、おのおの方物を貢す」という記事の「信覚」を石垣とする考えである。もし、この考えが正しければ、8世紀初頭すでに、海を渡り大和朝廷へ方物を献ずることのできる社会が成立していたことになるわけである。しかし、この考えに対する疑問がないわけではなく、宮城栄昌氏は否定的である。⁽⁷⁾

このようにして八重山の歴史は歩みだしたと考えられるのであるが、八重山の名が沖縄の歴史のなかにあらわれるのは、1390年の中山への入貢によってである。しかし、このときの入貢が如何なる人物によってなされたかは不明である。『球陽』に「中山、前に使を遣はして入京せしむ。其の使臣、風を被りて彼の嶋に飄至す。時に乃ち二島の人、琉球の事大の礼を行ふを見、各属管の島を率ゐ、臣と称して貢を納る」とある記事がそのことであるが、「属管の島を率ゐ」とあることより、おそらくはかなりの権力を有する人物ではあったであろう。

ところで、この時期の宮古・八重山の関係は対等関係というよりも、宮古の支配を相当にうけるようなものだったと考えられる。それは『慶来慶田城由来記』の「宮古島之とよめやと申人おきな加那志お手内召成不申時分にて彼の宮古⁽⁹⁾とよみやより八重山島総様手内に召成何篇相随ひさせ罷居候」という記述によっても知れよう。この文献には上の記述につづけて、「(豊見親が)年々きや木おもと竹ゑく木桑木家材木として所望断間敷有之取調積登取納致候得共又蔵材木としてよし木六七十本余、長四五間五六尺廻りかし木巷尺四五寸かく木所望被入候付無是非百姓等召集申付仲良山辺参りやまやとり相構こぞ嵩之近辺より右員数切木山より引出夫として男女二三百人余呼寄せ道筋過半引出候時分村より宮古とよめや相果為申由早使参に付惣人数承及大悦致右木は其所の川原に打捨さらばさらばとやぐい仕帰り道筋高辻に登差声仕候」。そして「山宿りへ罷帰り一夜一日あやぐ歌仕神酒焼酒盛にて遊び仕」とあるのである。豊見親が死んだという知らせを受けたとたん、これまで苦勞して伐り出した材木をうちすて、高山にあがって歓声をあげ、夜には酒盛りをし、歌をうたい終日遊んだというのである。この記事は、宮古の支配者である豊見親と八重山・西表の住民が支配・被支配の関係で強く結びつけられていたことを物語っているのである。

15世紀末葉の八重山では、石垣島には、平久保加那按司(平久保)、仲間満慶山英極(川平)、長田大主(石垣)、オヤケアカハチ(大浜)、波照間島に明宇底獅子嘉殿、西表島に慶来慶田城用緒、与那国島にサカイイソバ、鬼虎といった群雄が割拠し、互いに対立・連合していたと考えられている。

この群雄割拠という基本的構図の上におおいかぶってきたのが宮古の豊見

親勢力であり、琉球王国の尚真王であった。王国の支配下にあるにもかかわらず上納を拒絶した逆賊オヤケアカハチがひきおこした反乱とされる、いわゆる「オヤケアカハチの乱」が1500年におこる。これは第二尚氏第三代王尚真に派遣された首里王府軍と八重山在地の土豪との軍事抗争であった。王府軍は宮古勢力と長田大主側の水先案内を得てアカハチ軍を征圧することに成功した。これによって琉球王国はしっかりと八重山を版図に組み入れたのであった。

「オヤケアカハチの乱」の原因については、首里王府の土着宗教の禁圧政策によるものだとする説—イリキヤアマリの祭りを王府が邪宗だとして禁じたのに対し、八重山の住民が反発したとする説—と、首里王府の苛斂誅求に反発してのものとする説がある。しかし、この「反乱」は基本的には、八重山土着豪族間の対立抗争を下地としつつ、⁽¹⁰⁾尚真王によって中央集権国家を完成しつつあった首里王府が、領土画定の一環として八重山を版図に組み入れる作業を「反乱の征討」としてなしたものとみるべきであろう。その首里王府の計画に同調したのが、より開明的で、すでに八重山を支配しつつあった宮古勢力であった。八重山征討の後、仲宗根豊見親の二男である真刈金豊見親が王府より八重山の頭職に任ぜられ、八重山を自らの支配下におこうとする宮古側の意図は一応達成されたとみることができよう。

さて、このようにして八重山は首里王府の統治下にはいることになったわけであるが、八重山—宮古も—はあくまでも琉球王国の辺境の地であり、異族とみなされたのであろうか、王府の統治政策は沖縄本島およびその周辺諸島とは異なったものであった。

その最たるものが、1637年に制定された人頭税制度である。これは1659年には定額人頭税制となり、宮古・八重山の住民を苦痛のどん底に追いこむことになってゆく。八重山の苦難の歴史はここにひとつの転換点を迎えたといっても過言ではないだろう。

人頭税とは、宮古・八重山の正頭に頭割りに賦課した税で、その課税方法は「^{むらぐらい}村位を上・中・下の3等級（貢布は上下2等級）、人位を年齢によって上（21～40歳）・中（41～45歳）・下（46～50歳）・下下（15～20歳）の4等級に区分し、両者の組合せによった。上村上男女を14、上村中男女を12とし、以下順次この組合せにより最下位の下村下下は4である」⁽¹¹⁾。1659年当時の貢租額

は「八重山 2666 石余（正租 2280 石余〈807 石余米納、1472 石余反布代納＝4770 反余〉、五出米 340 石余）」という。

ここで一言つけ加えると、八重山の歴史にかかわる著名な伝説、例えばクブラバリの話、トゥング田の話、野底マーペーの由来、波照間島民のパイパティローマへの逃散譚といった話は他でもなく人頭税の苛酷さを物語るものである。また、八重山の島々に伝えられる歌謡には、人頭税として女性に課された貢布織製のつらさをうたったもの、王府の統治機構の末端を担った役人たちの横暴をうたったもの、生活苦をうたったものなどが多数ある。これらの説話・文芸は人頭税によって呻吟させられた八重山の人々のうめき声として発されたものというべきだろう。

そのような苛酷な歴史を歩んでいるさなかの 1771 年（明和 8 年）に地震と大津波が八重山を襲った。この津波によって当時の八重山の全人口の約 3 分の 1 にあたる 9300 人あまりの人が死んだといわれる。これは決定的な打撃であったと思われる。

さて、この津波のために、村が全滅状態になる、あるいはほとんどの人が死んで村の維持・運営ができないという村々が出来ることになった。そのため王府の為政者は、津波の被害がない、または微少であった村から、大きな被害を蒙った地域へ人を分け移す島分けという政策をとることとなった。島分けとは、文字通り、島を甲乙の二集団に分け、甲の集団は島に残って従来通りの生活を営むが、乙の集団は他島の新しい村を開拓するために島を出ていくように振りわけることである。この甲乙集団の決定は、集落を通る道路を境にして一例えば境界道路の右側に居住する人々を甲集団とすると、道路の左側に居住する人々は否応なしに乙集団となるようになされることもあり、道切りと呼ばれた。この島分け＝寄人・寄百姓によって大浜、宮良、白保、桃里、伊原間といった石垣島の東海岸に位置する村が再建されることになったのである。ちなみにこの島分けの政策は、それ以前にもあったものである。1732 年に石垣島の北部、野底村の再興のために黒島から、桃里村を興すために石垣島東南部の石垣、平得、大浜から、1755 年に西表南西部に新たに崎山村を建てるために波照間島から、多数の人々が島分けされていた。これらの島分けの悲哀をうたったのが「ちいんだら節」「舟越節」であり、「崎山ユンタ」である。この島分け

の痕跡は現在でも確認できるものである。例えば、新しい土地に分けられた人々は故郷の文化を携えてやってくるので、白保の方言が波照間島の方言に酷似するとか、白保に波照間御嶽がある、大浜に波照間島の大石御嶽を分祀して新たに大石御嶽を建てる、また、小浜島で行なわれているアカマタ・クロマタを祀る祭祀が宮良でも行なわれる、というようにである。

津波の被害は、疫病の蔓延というかたちでも残り、その後も八重山農村の衰微を生みつづけた。近世後期にいよいよ顕著になった慢性的な農村の疲弊状況を打開するため、王府は役人を派遣し、また、種々の「規模帳」や農務帳を出して村の運営改善をはかったり、農民の生活を管理しようとするが、結局、大⁽¹⁸⁾した成果をあげることにはつながらなかった。

このように、さまざまな負の要因を背負ったかたちで近世期の八重山の歴史は流れていったのであった。八重山の村々は慢性的な疲弊状況にあって、王府や蔵元－王府の八重山統治の出先機関－のテコ入れによっても立ち直りを獲得することなく、近代を迎えることになるのである。その疲弊ぶりとそれのもたらした精神的影響の大きさは、隣郡宮古で澎湃として起こった人頭税廃止運動と呼応する動きも示せなかった民衆の姿が物語っているとさえはしないだろうか。

1879年、琉球王国を琉球藩とした明治政府は、琉球藩（琉球王国）を解体し、日本国の一部とする琉球処分を断行した。沖縄県の誕生である。教育、行政の面で明治政府の意向は実践されていったが、諸事万般にわたる急激な改革を制動した明治政府の「旧慣温存」政策により、先島の住民生活は基本的には琉球王国時代のそれと大同小異であった。悪政の象徴である人頭税制はなおつづき、蔵元による統治システムはそのまま受け継がれていた。

このような「旧慣」が改められるのは、明治も36年⁽¹⁹⁾になってからであった。その間の八重山の状況は、宮古が人頭税廃止運動という民衆の決起をみたのに対し、何らの呼応・連動の動きもみせることができないほどに悲惨なものであったのである。その頃の八重山の農村の人々の苦境を描いたのが笹森儀助の『南島探験』である。

近代以後の歴史については割愛する。⁽²⁰⁾

沖縄・宮古・八重山対照歴史略年表

西 暦	国 王	沖 縄	宮 古	八 重 山
1372	察 度23	察度初めて明に入貢	この頃、日黒盛豊見親、与那覇原軍に勝つ	
1390	41		与那覇勢頭豊見親、中山に入貢	宮古とともに中山に入貢
1429	尚巴志 8	尚巴志、三山を統一		朝鮮漂流民、与那国で救助
1477	尚 真 1	尚真即位		オヤケアカハチの乱おこる
1500	24	八重山征討（オヤケアカハチの乱）	仲宗根豊見親ら、首里軍の先導役をつとめ、八重山を討つ。仲宗根豊見親、宮古頭職となる	真苺金豊見親、八重山頭職になる。長田大主、古見大首里大屋子となる
1501	25			慶来慶田城用緒、西表首里大屋子となる
1502	26			八重山島大安母、永良比金職（神役）、初めて首里より任せらる
1522	46		仲宗根豊見親、与那国の鬼虎を討つ	与那国で鬼虎の乱おこる
1524	48			西塘、竹富大首里大屋子（頭職）となる。竹富に八重山島蔵元がおかれる
1609	尚 寧21	薩摩の琉球入り		
1622	尚 豊 2			石垣永将、キリシタン法難事件
1637	17		人頭税制度創設される	人頭税制度創設される
1659	尚 質12		先島の貢租を上布で代納せしめる	先島の貢租を上布で代納せしめる（定額人頭税）

西 暦	国 王	沖 縄	宮 古	八 重 山
1713	尚 敬 1	尚敬即位。『琉球国由来記』できる	『御嶽由来記』できる (1707)	『八重山島由来記』できる (1705)
1729	17		先島役人へ家譜編集を命ず (系図座創設)	先島役人へ家譜編集を命ず (系図座創設)
1771	尚 穆 20		明和の大津波 (死者 2508人)	明和の大津波 (死者 ・行方不明者9313人) (村落の全廃・半廃 など続出。慢性的疲 弊がつづく) (強制移住による新 村建て等の王府の強 権的統治が展開する)
1853	尚 泰 6	ペリーの来琉		
1872	25	琉球国、琉球藩となる	台湾に漂着した宮古 住民が殺害される (54人) (1871年)	
1879	(明治12)	廃藩置県、分島案提示される	サンシイ事件	
1892	(明治25)		人頭税廃止運動おこ る	
1903	(明治36)		土地整理事業終了 (人頭税制度の廃止 へ)	土地整理事業終了 (人頭税制度の廃止 へ)

3. 八重山の人々のくらし

1477年、漂流していた3人の朝鮮濟州島の漁民が与那国島で救助された。彼らは、与那国島から西表島、波照間島、新城島、黒島、宮古の多良間島、伊良部島、宮古島を経て沖縄本島へ送り届けられた。そして、1479年に朝鮮に帰り着くことができた。彼らの見聞したことが『李朝実録』に記されており、15世紀の琉球社会のありさまをうかがう上で貴重な資料となっている。

それによると当時の八重山の生活は次のようなものであった。

〈衣生活〉

男女共徒跣^{はだし}で履物をはいていない。冠帯はなく、クバ笠を用いる。麻、木綿、絹はなく、苧麻^{ちよま}を用いる。布を織るのに篋^{おさ}や杼^ひを用いる。耳朶^{みみたぶ}に穴をあ

け、小さい青珠^{あおたま}を貫いたのを2、3寸ばかり垂れたり、珠を貫いたものを項^{うなじ}に3、4回繞らして、1尺ばかり垂れたりしている。これは男女とも同様だが、老人はしない。(与那国)

婦人は鼻の両旁を穿って小黒木を貫き、その状は鷹^{はくろ}のようである。数寸くらの小さい青珠を貫いたものを足脛のまわりにかける。(西表)

男女共耳を穿って小さい青珠を貫き、また珠を串いて項にかける。(波照間)

男女共青珠を以って臂^{うで}及び脛に繞繫する。

〈食生活〉

釜・鼎・匙・筋^{はし}・盤盂^{ばんう}・磁瓦器の類がない。土器はある。食物には専ら米を用い、粟はあまり好まれない。飯は竹筥に盛り、食卓はなく、拳大の握り飯にする。塩・醤油はなく、海水を用いて羹^{あつもの}をつくる。酒は濁酒はあるが清酒はない。肴には乾魚、膾を食す。木の葉に包んだ餅をつくり食す。牛、鶏の肉は食べない。蔬菜^{にんにく}には蒜、茄子、真瓜、蹲鴟^{いも}、生薑^{しょうが}がある。(与那国)

稲と粟を食するが、粟は稲の3分の1しかない。猪肉^{やまいも}や薯蕷は食べる。

(西表)

牛肉は食べるが鶏肉は食べない。(西表・波照間・新城・黒島)

黍、粟、牟麦^{おむぎ}はあるが、稲はなく、稲米は西表との交易で入手する。(波照間・新城・黒島)

蔬菜には茄子、蹲鴟、蒜^{ゆうがお}、瓠がある。(新城)

蔬菜には蒜、蹲鴟がある。(黒島)

〈住生活〉

部屋にはぶっ通しで奥座敷や窓などが無い。前方は軒がやや上がっていて、後方はひさしが地に垂れている。敷物には蒲席^{がまのござ}を用いる。居室の前方には別に高倉があって、収穫した稲を貯える。燈燭がなく、夜は竹を束ねて炬^{あかり}をとす。地を掘って小さい井戸をつくり、水を汲むのにひさごを用いる。

(与那国)

〈風俗・道具〉

酋長がない。盗賊がない。道におちたものは拾わない。罵言したり喧嘩したりすることがない。子供は可愛がるが、いくら泣いても放っておく。

文字はない。舟には舵や棹^{かい}はあるが、櫓がない。帆はある。鍛冶屋はいるが、スキはつくらない。

ここにみた八重山の生活状況は、同じ「漂流記」に記された宮古や沖縄のそれと比べると、かなり水準の低いものであったと判断されるものである。

この「漂流記」の記述が当時の八重山の生活・文化のすべてを描き尽しているとは勿論言えない。しかし、15世紀後葉の八重山の生活・文化のありさまを知ろうとする時、貴重な資料であることはまちがいない。

さて、この記事は15世紀後葉のことを書いたものであるが、ある部分では、近世期においてもあまり大差のないところがあるのではなかろうか。例えば、鉄の鍋釜は近代にいたっても重要な家財・道具であり、近代以前にあっては「ぱなりちいちいやーみゆんた」（新城島土甕ユンタ）という歌謡に、新城島で焼いた土鍋をもって周辺の島々に交易に出かけることが謡われているように、土器がなお重要な生活具としての位置を占めていたらしいことが推察できる。また、ブラヤコンという、ホラ貝の殻に鉤をつけた、薬罐がわりの湯沸しの道具が八重山の各地で使用されていたことも、「釜・鼎がない」とした「漂流記」の記述と近世以後の状況とが大差のないものであることを語っている。

また家屋についてみれば、近世期から近代にかけても、貧農階層は穴掘り屋^{アナブライヤー}と称される、堅穴式住居に似た家屋で寝起きしていたようである。これは、庶民の男性が家屋—それも貫木屋^{スキイギヤ}と称される本格建築の家屋—を建てることを人生の三大事業（井戸掘り、家屋新築、墓造り）のひとつとしたことでも推測がつく。つまり、これまた、「漂流記」の記述と重なるものと目されるのである。

衣生活にしても、徒跣にクバ笠という格好は近年までみられたものである。これらのことから、古代から近世そして近代にいたる歴史における八重山の庶民の暮らしぶりがある程度想像できるのではないだろうか。

つぎに生業について簡単にふれよう。⁽²²⁾現在の八重山の生業としては、農業、漁業、工業、商業、サービス業等があり、実に多岐にわたっている。しかし、このような生業の分化は近代以後、それも戦後に集中的にあらわれたもので、伝統的かつ基本的な生業は農業であった。その農業も現在は甘蔗、パイナップル、野菜等の生産が中心となりつつあるが、古来より近年にいたるまでその中核をなしてきたのは稲作であった。

ところで、「風土」の項でみたように、八重山の島々は高島と低島に分かれるが、高島では稲作が中心となり、低島では、水に恵まれないため、麦、粟、黍、稗、豆などの雑穀栽培中心の農業形態となる。先にみた「漂流記」に、波照間島、新城島、黒島では「黍、粟、^{おおむぎ}牟麦はあるが、稲はなく、稲米は西表との交易で入手する」とあるのもこのことを語っている。

ところで、先に述べた島分けの話は、基本的には低島から高島への人の移し替えとしてあった。王府は貢租の中心に米を考えているので、米を大量に生産させるために、稲作の可能な土地を有する高島へ島分けするのは、王府としては当然な施策であったはずである。しかし、高島には水のもたらず別の不幸があったのである。河川・沼沢が風土病マラリアの病原虫を媒介する蚊の温床となり、そのために、島分けされてきた人々はマラリアにたおれ、年を追って村は衰頹していったのである。

往時の農業のあり方について詳しいことは述べられないが、例えば首里王府から出された『八重山島農務帳』などの農業指導書に、王府の考えた、そのあ⁽²³⁾るべき姿がうかがえる。しかし、農民の耕作労働という点からみると、朝は未明に起き、6時には村のはずれの番小屋で役人の検問を受けて耕作地へかりたてられる。刻限に遅れたり、野良の帰りに牛馬の飼草を刈ってこなかったりすると科鞭として尻をうつ、といった奴隷的な監督労働がなされていたことが、同じ文書のなかにみられるのである。

4. 八重山のまつりと信仰

(1) まつりと信仰

農耕の技術が未熟であればあるほど、自然の力との関係は深刻である。この自然との関係を調和的なものとするための装置がまつりである。自然をつかさどる超自然的存在＝カミに作物の豊かな成長を祈り、豊穰を祈願することを重大な営みと考えるようになる。その具体的なあらわれがまつりなのである。そして1年の自然の推移と農業のサイクルを重ねあわせて年中祭祀が組み立てられることになる。『琉球国由来記』には八重山のまつりが種々記されている。⁽²⁴⁾これを表にしたのが次の表である。

ところで、この『琉球国由来記』記載のまつりが、現行のまつりと比べて少

いものであることはすぐに気づかれる。旧暦6月に行なわれる稲の収穫祭・プーリィもとりあげられていない。実際のまつりはもっと多かったはずである。試みに現在石垣島川平で行なわれている年中祭祀も併せて掲げよう。また、後掲の宮良の年中祭祀も参照していただきたい。

年中祭祀（「琉球国由来記」による）

- 2 月…二月御タカベ
- 3 月…三月物忌・山留（万作物ニ、不_レ虫付_レタメニ、悉皆、馬牛迄モ、浜下仕ル也）、（三月十五日ヨリ、五月十五日迄、草木切不_レ申也）
- 4 月…穂ノ物忌（万作物、穂見得ヘケレバ、蝗虫付不_レ申タメ、村中一人モ不_レ残、牛馬迄、浜下仕ル也）
- 5 月…シキヨマ祭（稲刈始メテ、茄デ米仕リ、作物ノ初トテ、一人ニ五勺宛出合せ、嶽々并根所ヘ祭り、祖父母・父母・伯叔父母・兄弟・姉妹、志次第送ル也）
- 7・8月…節（年婦シトテ、家中掃除、家蔵辻迄改メ、諸道具至迄洗拵、皆々年繩ヲ引キ、三日遊ビ申也）（己亥ノ日）
- 9 月…麦種子取（麦初種子蒔初メ、二日草木不_レ切、稲春不_レ申也）
- 9・10月…種子取（稲粟種子蒔初メ、三日遊ビ申事）
- 10 月…十月タカベ（為_レ火用心_ニ、竈廻仕リ、頭数一人ニ付、米五勺宛出合せ、嶽々ヘ祭申也）
- 12 月…サウリノ事（田植初メ、二日草木不_レ切申_レ也）

現行の年中祭祀（例：石垣市川平）

旧正月（1月）、ヤーラ願い（1月）、二月タカビ（2月）、二月ムヌン（2月）、草葉願い（3月）、スクマ願い（5月）、プーリィ（6月）、結願（8月）、世願（9月）、九月九日（9月）、節祭（9月）、十月祭（10月）、種子取り（11月）、石払い（12月）、ソーライ（種子取から数えて37日目か49日目）

ここで、八重山の人々の原基的な信仰についてふれてみよう。

まず、八重山の人々の伝統的な信仰の基盤にはニライ・カナイ信仰がみられる。これは沖縄の他の地域の伝統的な信仰のあり方と軌を一にするもので、海の彼方に想像上の豊かな国があって、豊饒はそこからもたらされると信ずるものである。豊年祭や結願（新城）、正月などにパーレー（爬竜船）をするのは実は、海の彼方のニライから世＝豊饒を乞い・貰いうけてくる儀礼であった。つまり、ユークイ（世乞い）である。また、「ウプユムチワール」（大世を持つ

ておいでになる)の歌で迎えられる世持神はニールピットゥ(ニール人)と称えられているし、竹富島の豊年祭、世迎え、種子取りなどのまつりで、ニール石を前にして海のかなたへ祈願をささげるのもニライ・カナイ信仰のあらわれである。すなわち、八重山のまつりの基底にあるものは、この信仰であるといつてよいだろう。

蛇足だが、ひとつ付け加えたいことは、沖縄および奄美諸島にみられるアマミヤ・シネリヤ、オボツ・カグラという世界観が八重山にはみられない、ということである。これは注意しておいた方がよい問題だと思われる。

(2) 八重山の御嶽信仰習俗

つぎに、八重山の人々の伝統的な信仰にとって、御嶽が重要な役割を果たしている、ということがある。ここで八重山の御嶽信仰習俗について多少詳しくふれておこう。

(2)－1 オンの構造

沖縄の諸島には御嶽と呼ばれる聖所がある。この聖所は、沖縄の諸島の村落における伝統的な宗教生活上の核をなすものであり、村人は御嶽の神に守護されることで自己の日常生活の平安が保持できると考えた。それゆえ、村人は敬虔な心で御嶽の神を祀ってきたのである。

この沖縄の諸島における御嶽にあたる聖所を八重山ではオン、ワン、ワー、ウガンそしてヤマなどと称している。オン、ワン、ワー、ウガンは、いずれもオガミ(拝み)からの変化と考えられる。ヤマは、その聖所が山丘あるいは森林中に所在することからの名称であろう。

一般にオンは山、丘、海浜などに立地する他、村内(集落内)にも立地する。いずれの場合も嶽域は樹木が茂り、オンそのものが森や林を形成し、その中に聖域空間が包含されているとみえる。

それではオン内部の構造を概括的に述べよう。

まず、嶽域を他の区域と区画する石垣あるいはブロック垣がみられる。これは特に集落内にあるオンの場合、ほとんどにみられるものである。しかし、集落を離れた、森の中にあるオンや、竹富、黒島、小浜、新城、波照間、与那

国、西表、鳩間の各島々のオンにはむしろそれがみられないのが普通である。

嶽域正面の入口には鳥居が建てられている。鳥居はほとんどがコンクリート製であるが、西表島や与那国島などでは木製の鳥居もみられる。鳥居は八重山のオンの初源の時からあったとは思われない。それは、現在も御嶽信仰習俗を固く保持する波照間島の御嶽がいずれも鳥居を有していないことから考えられる。すなわち波照間島の御嶽の姿に源初的なものを認めることができるからである。

入口を通ると神庭となる。神庭はミャー、メーなどと呼ばれる。メーは大きな庭、広場の意である。村の祭祀で神への奉納の芸能が演じられるのはこの庭である。そのため、この庭には舞台（^{サンク}、^{バンク}、^{バンコー}とも）がしつらえられている例もある。また、井戸などがある例もある。清浄な海砂やウル（枝珊瑚の碎片）などを敷いてあるのが一般的である。

ミャーの中央部付近に拝屋・拝殿がある。この建物はオンヤー（御嶽の家）、パイデン（拝殿）などと呼ばれる。現在、オンのほとんどにこの建物はあがあるが、波照間のピテヌワー（野原の御嶽）や、与那国の十嶽神社を除く他のウガンにはそれがないことに典型的にみられるように、本来は存しないものであったようだ。

オンヤー（パイデン）は屋根付きの建物で、中には神棚が設けられている。神棚はイベに坐す神への祈願をお通しするためのもので、まつりの時は、まず神棚に願意を告げて後、イベを拝むのが一般的のようである。神棚には香炉、花瓶、湯呑み茶碗の他、水入れ用のコップや灰皿（シャコ貝の殻）などの祭具が定式に従って配置されている。また、神棚の後壁には円形・楕円形の格子窓、扇形の小窓が一様に設けられている。これはイベへのお通しのための窓である。なお、オンヤーに複数の神棚がある場合は、それらはそれぞれ別々の神への祈願のために設けられたものである。

神女が夜籠りするのもオンヤー（パイデン）である。

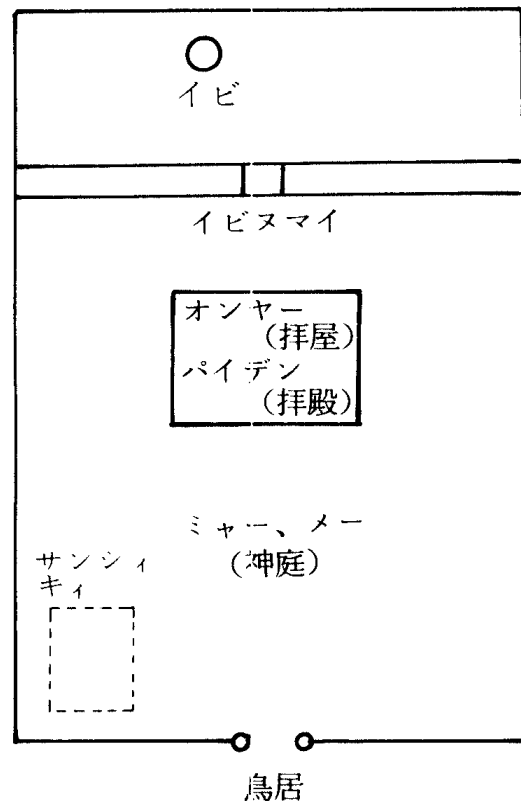
オンヤー（パイデン）の後方にイベがある。イベは嶽域内でも更に聖別され、石垣で囲われている（この石垣で囲われた域を便宜上イベ域と称すことにする）。イベ域の正面に石積みの門（アーチ型の場合が多い）がある。その門より奥へは神役の女性しか立ち入ることはできない。この門の下には香炉など

が置かれ、そこはイビヌマイ（イべの前）、ナカイビ（中イべ）、ナカドゥリィ（中取り）などと称する拝所である。カンマンガー、ティジリビ（手摺り部）などと称される男性神役のイべへの祈願はここでなされる。

イべ域の最奥部にイべがある。イべはイビ、ウブ、オボなどと、地域によって呼称に若干の異りがあるが、この地こそが聖域中の聖域である。オンの神はここに坐すわけである。イべにはオンの神の神体として巨岩や高さ1mにも満たない海石（石灰岩）があったり、大木が生えていたりするが、これらの神体の存在しないオンもある。イべには香炉が置かれている。

イべは不可穢の聖空間であり、イべは俗なる衆人の目から隔絶される必要がある。そのため、イべ域をことさらに石垣で区画するのであろう。イべ域を囲いつつ、更にイビヌマイからも直接窺い見ることのできない位置にイべの香炉は置かれている。それはイべの聖性という信仰的世界と深く結びついたものであろう。

以上がオンの構造についての概略である。これを図示すると右のようになる。



(2)－2 祭祀者と祭祀集団

オンに齋き、その神を祀る最高の祭祀者はチィカサ（司）と呼ばれる神女である。チィカサは日本語の「つかさ」に対応する語で、オモロでも「いべ」の対語として「つかさ」が用いられている。王国時代の首里王府の高級神女である「三十三君」の1人に「司雲上」（ツカサクムイ）がいるが、この神女名のツカサが八重山のチィカサ（宮古でも神女のことをツィカサ、ツィカサンマなどという）と重なる。職能的には沖縄諸島のヌル（ノロ）にあたる应该说よいだろう。カンチィカサ（神司）ともいう。

このチィカサがオンの神と人間をつなぐ役割を担うのである。古くは、神の

妻として純潔を求められ、未婚のままで神に仕えなければならなかったという。その残映が、チィカサはチィカサ墓に葬せられるという民俗となっていたのであろうか。

チィカサはオンの祭祀には神衣裳（白朝衣）を着け、カンヨージィ（神楊子＝簪）を挿して神を祀る。イべの中に入り、神を祀るのはチィカサである。

チィカサの下役にバギィチィカサ（脇司。単にバギィともいう）がいる。職務としては、チィカサの祭祀執行の補助役である。

この2つの神役はオンと関わりのある家系からでるのが一般的である。

チィカサ、バギィチィカサの他に、バガチィカサ（若司）と呼ばれる神女もいる。この神女はチィカサの見習いであり、血筋は特に問題とされない。

川平ではティナラビ（手並べ）と称される女の神役がある。この役は「神元屋の系統の女性」で「神司の次位に値いする」といわれる。

波照間・白保ではパナスファ、⁽²⁵⁾タカヌファと称される神女がいてチィカサの下位でチィカサを補佐している。

また、宮良では、仲嵩、山崎、外本、小浜の4オン以外の神女はニガイビー（願い部）と呼ばれ、かつてはチィカサとの間に、神衣裳などに差異を設けるようになっていたという。

竹富島の神女組織は、その最高位にフーチィカサ（大司）がおり、その下にシィンスチィカサ（次の司）、そしてカングナジィ（神女）又はバシィチィカサ（脇司）がいて、カンスファー（神の子）、スティヌファー（袖の子）、ニガイピトゥ（願い人）という階層構造をなすものであった。

一方、男性の神役もある。それはカンマンガ（大浜、平得他）、⁽²⁶⁾ティナラビ（鳩間、竹富他）、ティジリ（黒島）などと呼ばれる神役であり、「御嶽の保護管理、チィカサの祭祀儀礼の場を整えたりする」ヤマアタリィ（山当。ヤマ＝オンの担当者の意。宮良）、⁽²⁷⁾ムラブサー（村補佐。波照間）などである。これらの神役は特定の血筋を引く家柄、あるいは多数のヤマニンジュより1人だけ選出される役である。

これに対し、一般の氏子にあたる人々をヤマニンジュ（山人数。ヤマ＝オン構成員）という。波照間島では「7歳から73歳まで」の「ムラニンジュのうち15歳から50歳までのフダニン（生産人）をいい、ムラニンジュの当該部落

居住者のうち、島民の血を引いている者、島民との婚姻、縁組みなどを通じて居住定着しているものが、必然的に加入することによって構成されている部落単位の集団」という。

上記の神役とは別にトゥニムトゥと呼ばれる役がある。竹富では「氏子の総元帥であって、神山の祭りの直接の執行責任者である。神山を創設し、部落を創立した神々の家系で世襲している」。一般に村の宗家とされる。竹富ではトゥニムトゥの下に「オンをさ」⁽²⁹⁾がおり、「神山に関する諸事を執行する」⁽³⁰⁾役を担う。

(2)－3 オンの年中祭祀

オンの年中祭祀は先にもみたように、村落の伝統的な生活のリズムに従い、長年にわたって形成されてきた。その生活のリズムとは稲作を中心とする農業生産のこよみ⁽²⁸⁾であって、沖縄における年中祭祀は稲作農耕にかかる豊穰祈願と除災が基本となっているとみられる。

ここではオンにおける年中祭祀を宮良に例をもとめてとりあげ、語義を中心にごく大まかな説明を施すことにしよう。⁽³¹⁾

1 ショングジニントゥー（正月年頭）

正月の年頭の拝礼のこと。1月1日に行なう。オンのヤマニンジュの無病息災、農作物の豊穰祈願を行なう。

2 ショングジユニーガイ（正月世願い）

正月の世願い。ユーは豊穰、豊饒のことで、そのユーをオンの神に祈願する。五穀豊穰の祈願。

3 タカビ（崇べ）

稲作の願い。作物の播種、植付けを終了した報告と、作物の生育を祈る祭祀。タカビは崇べで、神を崇め、祈願する意。いわゆる二月タカビ。

4 フサバムヌン（草葉物忌）

稲の葉が順調に生育するようにとの祓いで、虫害及び風水害のないこと、また降雨などを祈るための物忌。虫払いが行なわれる。

5 プームニン（穂物忌）

稲穂の物忌。稲穂の生育がつつがないように祈る。

- 6 ウフラシムニン（ウフラシム物忌）
ウフラシムは地名で、「稲、粟、黍等の農作物の取り入れが間近で村近くまできた」ことをこの地名をあげて示す。豊穰の祈願と天候の好順を祈る。
- 7 スクマンカイ（初穂迎え）
稲の初穂祭。スクマは沖縄諸島のシチュマ、ツマ、シキョマと同じで、稲の初穂をまつり、稲穂の結実を祈る。
- 8 ルクガジューニガイ（6月世願い）
6月の豊穰願い。6月のユニーガイはユースシュビ（世の首尾）といわれ、首尾、すなわち「五穀豊穰と住民の健康の感謝」祭である。
- 9 フーナアギ・オンプーリィ（穂花上げ・御嶽豊年祭）⁽³³⁾
穂花上げは、稲の収穫感謝のために稲穂を神に上げること。オンで行なわれるプーリィであるからオンプーリィという。豊年をオンの神に感謝する、年中最大の祭祀。
- 10 ユーニガイ・ムラプーリィ（世願い・村豊年祭）
来年の豊穰祈願。ムラプーリィはオンプーリィに対するもので、翌年の豊穰を祝福するために来訪神が村を訪れる。
- 11 パチィガジューニガイ（8月世願い）
8月の豊穰祈願。これからの1年の豊穰を祈願する。
- 12 ミジィニガイ（水願い）
水の神に対する湧水他の祈願。井戸水、湧水、流水、堰の水をつかさどる神への祈願が主という。
- 13 クニチヨイ（9日祝い）
9月9日の祝い。芋（甘藷）のお初を神にさし上げる。ヤマニンジュの健康祈願を行ない、菊酒を飲む。
- 14 シチィ（節）
節のあらたまりを祝う。正月にあたる。部落民一同の健康祈願、除災招福を祈る祭祀。
- 15 タカビ（崇べ）
いわゆる十月タカベ。火の用心を主旨とする。
- 16 タニドゥリィ（種子取り）

稲の播種儀礼。「種子取は1ヶ年のウフスクル（大作）といい、苗の出来、不出来が豊凶につながることからナイノウルド マアノウル（苗の好いのが稲の稔りにつながる）といわれていた」から、タニドゥリィは極めて重要な祭祀であった。⁽³⁴⁾

17 ニンヌシュビ（年の首尾）

年の首尾、すなわち1年の祭祀に対する神の加護への感謝祭。

以上が宮良のオンを中心とする年中祭祀のあらましである。1月から12月まで、7月を除いて（7月は祖先供養祭があり、神祭りは避けられる）毎月のように祭祀がとりおこなわれ、生産活動と村落生活の各部に御嶽信仰か息づいていることが分る。⁽³⁵⁾

御嶽を舞台としてくりひろげられるまつりは、八重山芸能をはぐくむ母胎でもあった。御嶽と芸能のかかわりについては次節で述べることにしよう。

5. 八重山の芸能文化

前節でみたニライ・カナイ信仰や御嶽信仰を基盤として八重山の芸能は生まれ育ったものと思われる。

ここで八重山の芸能を概観すると、まず大きく、民俗芸能（広義）と古典芸能に2分類されるであろう。広義の民俗芸能は更に、祭祀芸能と狭義の民俗芸能に分けられよう。これを簡単に示すと下図のようになる。この分類に従ってそれぞれ簡単に説明していこう。

まず、祭祀芸能にはアカマタ・クロマタ、節祭のマーユンガナシィなどのまつりの芸能がある。これらのまつりは海のかなたから豊饒をたずさえてやってくる神を迎えるまつりである。例えば、アカマタ・クロマタのまつりでは、アカマタ歌と呼ばれる、来訪神を迎え讃える歌をみなでうたう（新城）。この歌は1年に1度、このまつり以外ではうたわないもので（録音したり、ノートに記録したり、まつりの撮影などは固く禁じられている）、その秘儀性はきわめて強い。アカマタ・クロマタのまつりに関わる芸能は、そのまつりの場に深く結びついており、他の場面ではみられない祭祀芸能といえる。

つぎにマーユンガナシィのまつりであるが、これは川平で現在も行なわれ

ているもので、毎年旧暦9月のシチィ（節祭）に来訪する豊饒神にかかる祭祀である。マーユンガナシィ（真世加那志）とは、真の世^{マニ}=真の豊饒なる世をもたらず神の意である。このマーユンガナシィが、村の家々を訪い、豊饒予祝のカンフチィ（神口）を唱え授けていくのである。このカンフチィは神の言葉とされるもので、「石垣島のずっと北の方から豊饒をたずさえてやってきたマーユンガナシィの神が田や畑に稲、粟、豆その他の作物を蒔いたからには、収穫の時節には豊作である」というような内容である。つまり、マーユンガナシィの神が豊饒を予祝する呪詞なのである。これも日頃はみだりに口外されるものではないものである。

このように、まつりの場に深く結びついている芸能を祭祀芸能としてまとめておこう。

狭義の民俗芸能は、まつりなどともかかわりながら、日常的な場面においても展開される芸能と考えておこう。それには、巻踊りやアンガマー盆アンガマ、節アンガマ、33年忌のアンガマ、家造りアンガマなどがある。タイラク、キョングン、ユングトゥの他、多数伝えられてきている歌謡がある。祭祀芸能と民俗芸能（狭義）が八重山の芸能の中核をなすものであった。

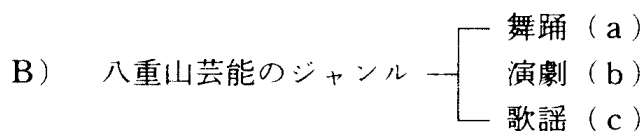
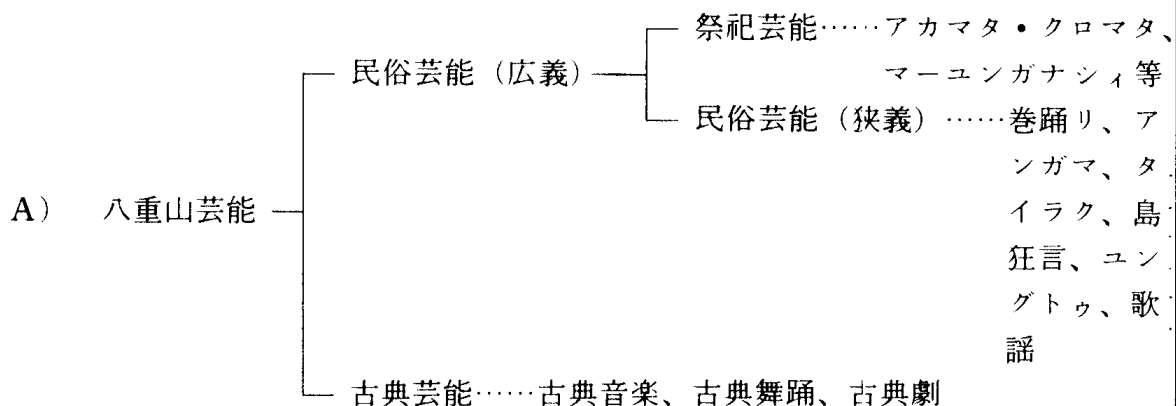
古典芸能には古典音楽、古典舞踊、組踊などの古典劇が分類される。これらは、八重山地生いの芸能が他地からの刺激を受けて新しく創出された、あるいは他地から招来されそのまま根付いた組踊などのような、楽式・形式の定まった芸能と位置づけておこう。

これら3つの芸能が八重山の芸能を構成しているわけであるが、これを別の角度から分類すると、さしあたり、舞踊、演劇、歌謡という3つのジャンルに分けて考えることができる。

これをひとつずつ簡単にながめてみると、まず舞踊は庭の舞踊と舞台の舞踊に分けられる。庭の舞踊とは各種の祭儀の神庭で奉納される舞踊で、巻踊り、タイラク、棒踊り、獅子舞い、太鼓芸などがある。これに対し、舞台の舞踊⁽³⁶⁾とは、若衆踊り、二才踊り、女踊り、打組み踊りなどと称する、古典舞踊と分類されたものが主流を占める。

演劇は、狂言と組踊にわかれる。狂言はキョングンー沖繩諸島ではチョーギンーと呼ばれる。狂言とっているが、能狂言のように滑稽であることを、必

八重山芸能の分類図



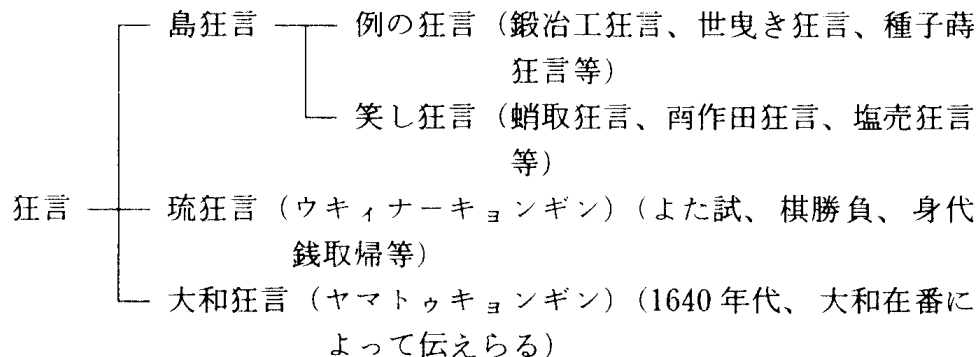
a : 舞踊

a-1 庭の舞踊—巻踊り、タイラク、棒踊り、獅子舞

a-2 舞台の舞踊—若衆踊り、二才踊り、女踊り、打組み踊り

b : 演劇

b-1 狂言 (キョングン)



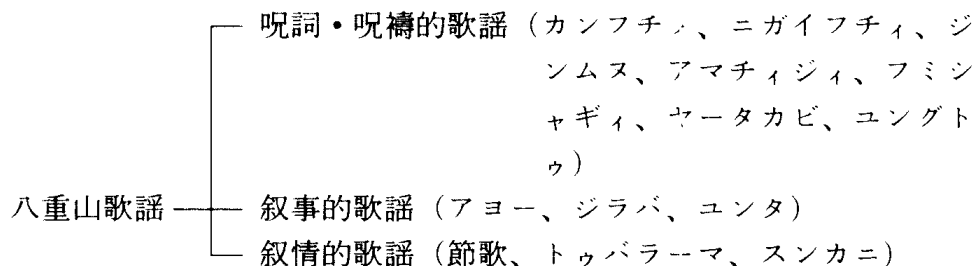
b-2 組踊

• 竹富の組踊 (花売の縁、伏山敵討、父子忠臣)

• 黒島の組踊 (忠臣身替り、忠孝婦人、手水の縁、伏山敵討、久志の若按司)

• 与那国の組踊 (二童敵討、孝女布晒、北山敵討、忠臣身替り、忠孝婦人)

c : 歌謡



ずしも意味するわけではない。狂言とは芝居一般のことである。さて、このキョウギン⁽³⁷⁾は3つに分けられる。すなわち「島狂言」^{シマキョウギン}「琉狂言」^{リュウキョウギン}「大和狂言」^{ヤマトウキョウギン}の3つである。

「島狂言」とは八重山地生いの狂言のことで、竹富島の例をとってみると、ジンヌキョウギン（例の狂言）とバラシキョウギン（笑わせ狂言）に分けられる。「鍛冶工狂言」「世曳き狂言」「種子蒔狂言」などのように、奉納芸能のなかでも特に格付けのされた狂言が前者である。これに対し後者は、もっぱら滑稽を旨として、神を喜ばせ・笑わせ、かつ、まつりの参加者＝観客をも笑わせることによって、神まつりを一層にぎにぎしくするものである。

「琉狂言」というのは、沖縄本島から流入してきた狂言で、一名ウキナーキョウギン（沖縄狂言）と呼ばれたものである。しかし、これは現在演じられていない。

「大和狂言」というのは、大和（日本）から流入してきた狂言で、『謡囃子踊狂言組』という文書が残されていて、これには「不聞座頭」「文山賊」「与所女」⁽³⁹⁾「朝比奈」などが収録されている。この狂言も現在では演じられていない。

形式の面からみると、狂言は1人で演じられる1人狂言と、複数の人で演じられるものの2つに分けられる。前者については、ユングトウとの関係がどうなっているのか、興味深い問題があることを指摘しておこう。

組踊が沖縄本島から入ったことは明らかなことである。かつては八重山の各地で演じられたらしく、竹富では現在も種子取り祭の奉納芸能として演じられているし、与那国からは組踊の写本も発見されている。石垣でも旧家には組踊の写本が多数残されており、士族階層のなかでは組踊が演じられたことを十分にうかがわしめる。黒島や西表崎山といった寒村でも組踊が演じられていたという報告がある。

歌謡のほうは「詩の国・歌の島」といわれるように、質量ともに豊富で、みるべきものが多数ある。外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成Ⅳ 八重山篇』⁽⁴¹⁾には1051篇の呪詞・歌謡が収録されている。外間守善氏の「八重山の歌謡」⁽⁴²⁾に示された分類を借りて八重山歌謡を分類すると先の図（23頁参照）のようになるだろう。

呪詞・呪禱的歌謡は、主にまつりのときに神役（チカサなど）によって唱

えられたり、また、祭祀集団の構成員によってうたわれるものである。

叙事的歌謡は、一般に労働の場でうたわれることが多いのであるが、祭祀の場で機能するものもまたある。しかし、そのジャンルの特質を一言でいうならば、ジラバやユンタに代表される物語性のある歌謡で、社会におこった事件、労働のつらさ、男女の恋愛など、幅広い題材をうたった歌謡群、ということになるだろう。

八重山の抒情的歌謡の双璧はトゥバラマ（トゥバルマー）とスンカニ（ジョンガネー）である。この2つの歌謡は男女の恋愛、親子の情愛、懐旧、望郷、別離の悲哀等をうたう純然たる抒情歌といってよい。「トゥバラマとスンカニの後には歌はもううたえない」と言われるように、感情が最高潮に達した時に発せられる歌謡なのである。特に、現在でもトゥバラマの旋律にのせて自己の情念をうたうことは続いており、八重山民謡というと、トゥバラマというほどに人口に膾炙している。

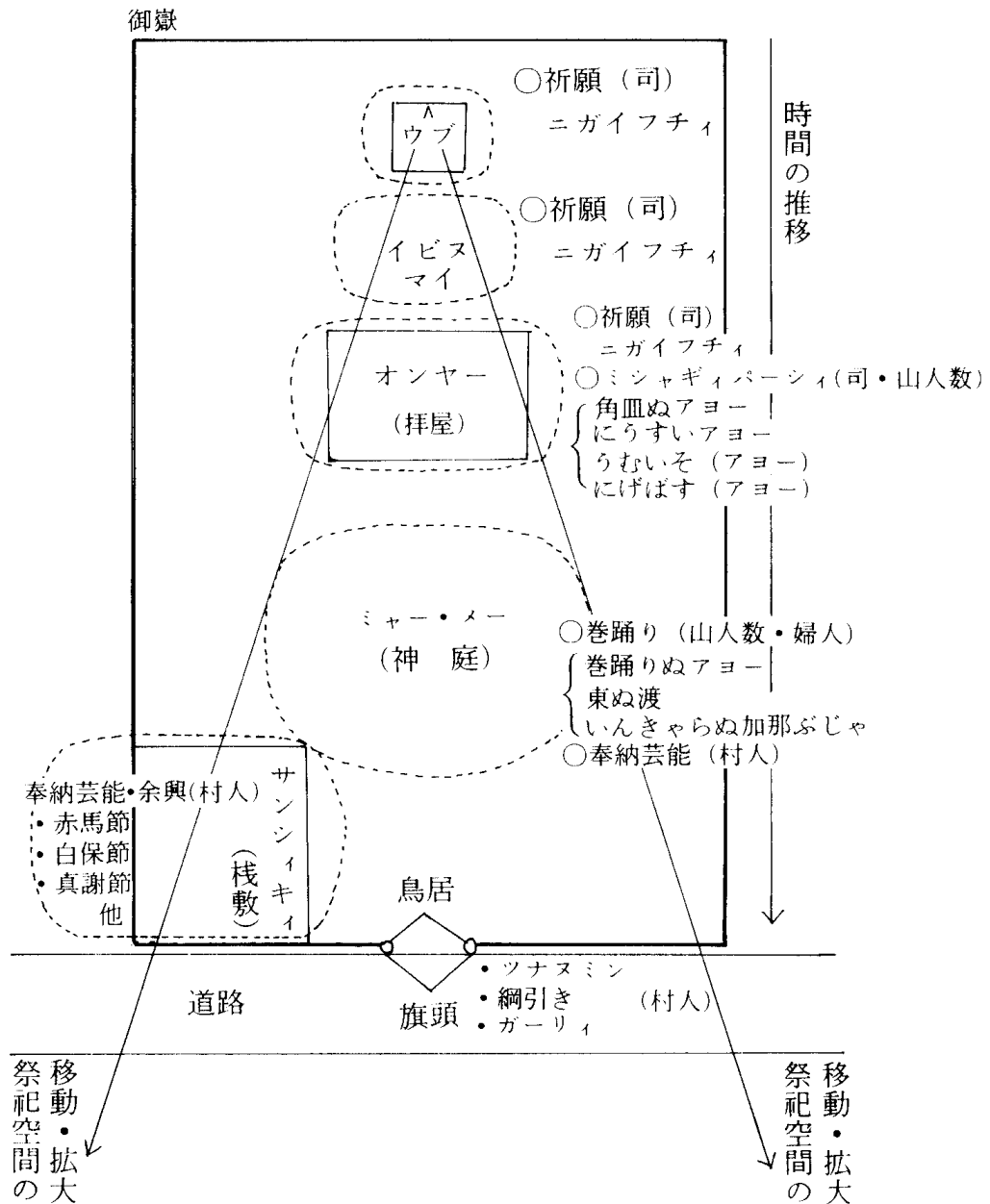
節歌は古くから三線の伴奏を得てうたわれてきたもので、そのジャンル名も「赤馬節」「鷲ぬ鳥節」「仲筋ぬぬべま節」などと、曲名に「～節」とつくところからきたものである。節歌のジャンルは、三線の伝来という文化的事件があってはじめて成立したものである。八重山の節歌の特徴は歌詞と曲が1対1の対応関係を示すところにある。すなわち、沖縄諸島の「～節」と称される〈節歌〉が1つの曲に無数の琉歌体の歌詞をのせてうたうのとは根本的に異っているのである。

八重山歌謡にはこれらの歌謡の他、口説や念仏歌謡など他地から伝来してきたものもある。

以上、八重山の歌謡についてきわめて大雑把に紹介した。

つぎに八重山の芸能のおこなわれる場について概観しよう。まず、歌謡の“場”と祭祀空間の関わりを模式的に示すと下図のようになるであろう。イビではチィカサのニガイフチィが唱えられ、イビヌマイではチィカサら神役のニガイフチィが唱えられ、オンヤーではニガイフチィ、アヨーがチィカサ、ヤマニンジュによって唱え、うたわれる。そこより更に俗的世界に近いミャーでは、ニガイフチィは唱えられることはなく、ヤマニンジュらによってアヨーを中心にした歌謡がうたわれ、巻踊りが踊られる。ミャーの一角に設けられたサ

ンシィキィ（栈敷）は奉納芸能の舞台で、ここでは村人らによって芸能がくりひろげられ、舞踊の地謡として節歌・口説歌謡などが演唱される。御嶽の入り口の前の路上では、ツナヌミン、綱引き、^{ガーリ}競舞などの、村人総出の芸能が展開される。



プーリィ
（石垣市白保の豊年祭の祭祀空間と歌謡の相関モデル図）

次に黒島の豊年祭における芸能のあり方についてみてみよう。黒島の豊年祭にはニライ・カナイから豊穰をうけるためのパーレー（舟漕ぎ競争）がある。この祭儀に先立って、シドゥ（勢頭）、ウーニ（御舟役）を先頭に舟子達はチ

ィカサとともに自村の御嶽に詣で、御嶽の神に祈願をささげ、神歌をうたう。それがすむと浜に下り、舟漕ぎとなる。舟は「ユーヤートー ユーヤートー」（世を賜れ 世を賜れ）というかけ声とともに沖に漕ぎ出していく。そして一定の地点までくると舳先を島の方に向け、銘々の村の御嶽を拝し、すぐに競漕となる。浜辺の祭場には各村の旗頭がたてられていて、その後方に村人の座がつくられている。競漕の勝負がつくと、勝った村はシドゥ、ウーニを迎え、旗頭を中心に巻踊りとなる。これが終わって奉納舞踊となる。奉納舞踊は、弥勒の入場が最初で、その後に各種の芸能－棒術、笠踊り、鍬踊り、鎌踊りなどが演じられる。

この黒島の豊年祭は、ニライの神から豊饒を乞い受け、弥勒神の来臨を得て、村中の人間が神歓待の芸能を演じる（そして、まつりの後には神送りをする）、という形に整理できる。この形は石垣四ヶ村の豊年祭とも共通するものである。

八重山各地の豊年祭、結願祭、節祭、種子取り祭では御嶽を中心にして、祭祀と芸能が不可分のかたちで展開されているのである。

ここで家レベルの祭儀における芸能についてもみてみよう。石垣島では石垣四ヶ村を中心としてソーロンアングマ（盆アングマ）がある。このアングマ行事は竹富にもある。石垣のソーロンアングマでは次のようなかたちで芸能が組み込まれている。

まず、仮面・仮装のアングマ集団が三線、太鼓の音にのせて念仏歌をうたいつつ行進して訪問先の家にやってくる。そして座敷にあがった一行は、円陣行進しつつ念仏歌にあわせて手踊りをし、頃合いをみて着座する。その後、翁・媪の口上（祖先の霊への報告・祈願）があって芸能の披露となる。そこでまっ先に踊られるのは翁・媪の無蔵念仏で、これは定式である。その後、座開きの祝儀歌舞である鷲の鳥節、赤馬節が踊られ、以後は日出度節、川良山節、朝花節、高那節、上り口説、六調節、浜千鳥節、四季口説、繁昌節などの明るく、快活な曲調の節歌にのせて舞踊が踊られる。（いずれの舞踊も節歌を地謡としていることに注目したい）。

宮良の盆の行事であるイタチィキィバラでは、村の宗家であるトゥニムトゥを順々に廻り、念仏踊りを奉ずる。

この他、諸祝儀^{シヨウニシヨイ}—生年祝い、結婚祝い—の場にも芸能はつきものであった。「あんぱるぬみだご—ま」というユンタに「みだご—まぬ まりどしでんど／かんかじぬ ぎぬうぬあんど」（目高蟹の生年の祝いだよ／すべての蟹ごとの芸能があるよ）とあり、いろいろな蟹が、笛吹き、三線弾き、太鼓打ち、踊り手、狂言役者、棒踊り演者に割り当てられる他、包丁役（調理）、供饌調え役、給仕役、茶くみ役に任ぜられることがうたわれている。これはまさに生年祝いのにぎにぎしいありさまをうたったもので、生年祝いという通過儀礼と芸能とが古くから結びついてきたことを教えてくれるものである。

ここで結論的に言えば、八重山の芸能は、御嶽を中心にした村落祭祀の場と深く結びつきつつ、村落生活の日常的な場面における諸祝儀にまでその場を拡大していっているといえるであろう。これはひとり八重山の芸能だけのありようではなく、沖縄・日本の芸能の歴史の展開の場面でもみられたものであろう。

以上、縷々述べてきたことから、八重山芸能の特徴についてまとめてみよう。

第1に、八重山の芸能は農耕祭祀と深く結びついたものであり、豊穰をもたらす神への感謝と祈願の心を表現するものと考えられること。

第2に八重山の芸能は、八重山地生いの芸能に沖縄本島や大和の芸能、それに南方系の芸能が少なからず影響を与えて形成されたものと目されること。例えば、豊饒の象徴である、来訪神・弥勒にかかる伝承は、はっきりと「安南国」（ベトナムという）よりの伝来を語っているし、小浜島に伝わるダートゥーダーという仮面仮装の舞踊は南方系の芸能だといわれている。それに、棒踊りが一名、パイヌシマボー（南の島棒）と称されることも留意すべきことである。

沖縄や大和からの外来芸能についてはすでにみた通りである。これらの芸能を招来したのは主に士族階層の人たちであった。八重山の節歌や古典舞踊は当初、士族階層の人たちによって担われた芸能として出発した。三線や女踊り、若衆踊り、二才踊りといった外来の楽器、舞踊の形態・手法を借用して現在みる八重山芸能の古典芸能が創出されたわけである。それは、あるいは模倣の段階から始まったかもしれない。

しかし、このことは何も八重山芸能のもつ美しさとそれに対する評価をおとしめることではない。何故なら、八重山芸能のもつ美しさとは、外来芸能の単なる模倣をのりこえて、八重山地生いの芸能のなかに外来のそれを取りこんで新しいものをつくり出そうとする営みによってもたらされたものではないか、と考えられるからである。例えば、舞踊でそれをみると、沖縄の踊りの技法を取り入れても、地謡はあくまでも八重山の歌謡を使い、衣裳も八重山の民俗衣裳を用いるというように、八重山的なものをうち出そうという姿勢がある。この2つのものの調和が八重山芸能の美しさをつくっている、という指摘はすでに先学のなしたことでもある。⁽⁴³⁾これが3つめの特徴である。

八重山の芸能は芸能だけが独自に存在しているのではなく、八重山の歴史、八重山人の生活の営みと深く関わって存するものだということを、絶えず念頭においてみてゆく必要があるだろう。

〈注〉

- (1) 首里王府編の琉球最古の歌謡集。全22巻より成り、1554首の歌謡オモロが収録されている。第1巻が1531年、第2巻が1613年、第3巻以下は1623年に成立した。沖縄の古代文学及び民俗、宗教、思想などを研究するうえで必須の古典である。
- (2) 笹森儀助『南島探験』参照。笹森儀助・東喜望校注『南島探験 琉球漫遊記』(1. 2) (1982・1983年 平凡社刊)
- (3) 石原ゼミナール・戦争体験記録研究会『もうひとつの沖縄戦—マラリア地獄の波照間島—』(1983年 ひるぎ社刊)
石垣市史編集室編『市民の戦時・戦後体験記録集』第1集～第4集参照。
- (4) 大浜信賢『八重山のマラリア撲滅』(1968年 信毎書籍) 参照。
- (5) 「八重山島由来記」中の「八重山嶽々名并同由来」の宮鳥御嶽の項参照。
(『南島』第1輯収録)
- (6) 『注(5)書』中の「崎原御嶽」の項参照
- (7) 宮城栄昌『琉球の歴史』(1977年 吉川弘文館刊)
- (8) 首里王府編『球陽』巻一 察度王41年「宮古・八重山、始めて来朝し入貢す」の項。(球陽研究会編『球陽』読み下し編 1974年 角川書店刊)

- (9) 著者不明『慶来慶田城由来記』（成立年不明）。
- (10) 牧野清『新八重山歴史』（1972年 自家版）参照
- (11)・(12) 仲宗根将二「人頭税」（『沖縄大百科事典』1983年 沖縄タイムス社刊）。なお、八重山の人頭税については、大浜信賢著『八重山の人頭税』（1971年 三一書房刊）参照。
- (13)・(14)・(15)・(16) 新川明『新南島風土記』所収「人升田と久部良割り」「裏石垣に埋もる秘話」「幻の楽土『ぱい・ぱていろーま』」参照。（1978年 大和書房刊）
- (17) 牧野清『八重山の明和大津波』（1968年 自家版）参照
- (18) 『与世山親方八重山島規模帳』（1768年）、『与世山親方八重山島農務帳』（1768年）、『八重山島杣山職務帳』（1854年）、『八重山島諸村公事帳』（1875年）など。
- (19) 以上の歴史にかかる叙述については外間守善『沖縄の歴史と文化』（1986年 中央公論社刊）等参照されたい。
- (20) 注(2)に同じ
- (21) 伊波普猷「朝鮮人の漂流記に現れた十五世紀末の南島」『伊波普猷全集』第五巻（1974年 平凡社刊）参照。
- (22) 外間守善『（注）19書』参照
- (23) 注(18)参照。
- (24) 首里王府編『琉球国由来記』。1713年成立。
- (25) 川平公民館編『川平村の歴史』（1976年 川平公民館刊）
- (26) 崎山毅『螻蛄の斧』（1972年 自家版）
- (27) 宮良村誌編集委員会『宮良村誌』（1986年 宮良公民館刊）
- (28) 加屋本正一『波照間島』（1978年 自家版）
- (29)・(30) 崎山毅『注26書』参照。
- (31)～(34) 宮良村誌編集委員会『注27書』参照。
- (35) 以上「(2)八重山の御嶽信仰習俗」については拙稿「八重山の御嶽信仰習俗覚書」（『沖縄芸術の科学』第1号）によった。
- (36) 棒踊り、獅子舞いなどについては「技もの」として別に分類する考えもある。（石垣博孝「八重山芸能所感」『八重山毎日新聞』1987年）

- (37) 牧野清氏の命名である。牧野清『登野城村の歴史と民俗』（1975年 自家版）参照。
- (38) 故喜舎場永珣蔵・桃原全能筆『琉狂言』（二冊本）による名称。同書には35の演目がみえる。
- (39) 故宮良賢貞蔵本。
- (40) 川平永美「わたしの崎山部落誌」『八重山文化』8号（1981年 東京・八重山文化研究会刊）
- (41) 外間守善・宮良安彦編『南島歌謡大成Ⅳ 八重山篇』（1979年 角川書店刊）
- (42) 外間守善「八重山の歌謡」『南島歌謡大成Ⅳ 八重山篇』参照
- (43) 本田安次「沖縄の芸能」『南島採訪記』（1962年 明善堂書店刊）参照。

付記・本稿の「風土」「歴史」の項を執筆するにあたっては、『角川日本地名大辞典 47 沖縄県』（1986年 角川書店刊）を参照した。

本稿は『日本民謡大観（奄美・沖縄）八重山諸島篇』（日本放送協会編 1989年4月刊行予定）の解説に大幅に加筆したものである。同書解説及び本稿の作成にあたっては外間守善法政大学教授のご指導をいただいたことを記して、深く感謝申し上げます。